

主は羊飼い

[聖書]詩編 23 編 1～6 節

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしをカブける。わたしを苦しめる者を前にしても／あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ／わたしの杯を溢れさせてくださる。命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう。

[序] 詩編の中の真珠

聖書の中に信仰の歌150から成る「詩編」と呼ばれる詩集があります。その第23編は「詩編の中の真珠」といわれて、世界中の多くの人に親しまれて来ました。今回小さな川越教会に応援に来てくださった大泉バプテスト教会聖歌隊の皆さんが、この第23編から生まれた歌を次々と歌ってくださいますので、私もこの詩から、信仰のメッセージをお取次ぎさせていただくことにしました。

[1] 厳しい自然の中で生きる

聖書の信仰が養われた舞台はパレスチナ地方です。第二次世界大戦後に、国連の後押しでユダヤ人の悲願であるイスラエルという国家が約1900年振りに再建されました。昔の都エルサレムはユダヤ教・キリスト教・イスラム教の聖地で、それぞれの神殿や教会が多くの礼拝者を世界から集めています。

これは写真家善養寺康之さんの「聖地ひとり歩き」という本ですが、「荒野の羊」という一文をちょっとご紹介させていただきます。彼はエルサレムからエリコの町に下っていく途中の荒野で、炎天下にじっとただずむ羊の群れに出会いました。

「ここは、身を隠すものは木立一つない荒野である。ただ真上から照りつける太陽をまともに受けても、大地に生きる生物は為す術を知らない。羊たちは互いに身を寄せ合って日陰を作り、じっと、この過酷な太陽が西に傾くのを静かに待つのである。時折、隣の羊の下に首を突っ込んで暑さをしのごうとする動作を除いて、沈黙を破るものはなかった。それは気の遠くなるような、暑さと時間との闘いであった。」

「耐え難い時間がどれくらい続いたであろうか。にわかには羊の群れに落ち着きがなくなって来た。すると何処にいたのだろうか、今まで姿を見せなかった羊飼いの少年が現れて、首に鈴を付けた羊を先頭に立たせると、羊たちはおもむろに歩き始めて、見事な列を作るのであった。」

「このパレスチナの大地に生きるすべての生物は、圧倒的ともいえる自然の下にあって、すべての事に為すべき時があることを知っている。その時が来ない限り、いかに叫び求めても自然は沈黙を守って、語ってはくれない。私は羊を見守っているうちに、神の試練の中で耐え、待つことの意味を知らされたような気がした。」

この詩の書き出しの言葉「主は羊飼ひ。わたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴ひ、魂を生き返らせてくださる」だけを口ずさむ限りなら、日本で暮す私など、のどかな牧歌的風景を心に浮かべてしまいます。しかし善養寺さんの文にあるように、標高720mの山上の都エルサレムから海面下250mのエリコの町に1000mも下っていく道や、南のヘブロンやベエルシバへと続く丘陵地帯は、私もレンタカーでドライブして回りましたが、太陽から身を隠す木立一つない荒野です。6月なのに40度を超す暑さで、車の中に置いた飲み水のペットボトルが大きく膨張し、お湯になっていました。

羊は非常に迷子になり易く、敵の攻撃から身を守る能力がきわめて弱い動物だそうです。草原や水辺へと導き、外敵の攻撃から守ってくれる良い羊飼ひがいなければ、たちどころに滅んでしまうでしょう。とにかく非常に厳しい自然の中で羊も羊飼ひも、生きていました。

私たちの人生も、穏やかで安全な日々ばかりではありません。過酷な太陽が西に傾くまで、じっとただずんで、暑さと時間と闘っていなければならぬような場面に、遭遇することもあるのです。試練の中で耐えて待つよりほかにない時もあるでしょう。まさにその時に、この詩は私たちに力を与えてくれる宝となるのです。

[2] 人生の試練の中で

私たちの人生に試練をもたらすものとして、死と敵があります。作者ダビデ王は先ず「死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない」と歌いました。世間の非難を集中的に浴びたある業者夫妻が自殺してしまいました。46年間一筋に励んで築いた信用を失い、非難にさらされながら、償いのために財産を失っていく今後を思いやった時、死んだ方がましだと受け取ったのでしょうか。死そのものよりも、死の陰におびえたのです。

英語の或る訳は“the deepest darkness”と訳しています。まさに絶望をもたらす真っ暗闇が、私たちを死に追い立てるのです。癌を宣告された時もそうでしょう。これから待ち受けている治療の苦しみ、自分の役割を果たせなくなる申し訳なさや、愛する者との死の離別の悲しみ等を考える時に、the deepest darknessが私たちの心を圧倒します。

しかしダビデは歌いました。たとえどんなに暗い死の陰の谷を進んで行かなければならないとしても、どんなに大変な災いが待ち受けているとしても、私は恐れなくて進んでいける。なぜならば貴方が私と一緒にいてくださるから。敵を打ち据える鞭、私を道からはみださないようにしてくださる杖を貴方は持っていらっしゃるから、勇気が湧いてきます。貴方はご自分の信用と名誉にかけて、私に正しい命の道を歩き抜かせて下さるに違いないからです。

次にダビデは「わたしを苦しめる者を前にしても、あなたはわたしに食卓を整えてくださる」と歌いました。私に悪意を抱き、私を打ち倒そうと攻撃してくる敵、私を失敗させて自分が得をしようと企むライバル、大勢を虐げて自分の権勢を立てていく野心家たち。社会にはそういう敵が大勢いるのです。災害とか病気・事故など、特定の敵でなくても、私たちに大きなダメージを与えて生活設計を狂わせてしまう出来事も襲ってきます。

そうなる食事を作る余裕がなくなりますし、食事を出されても喉に通らなくなってしまいます。すると神さ

まは、「落ち着きなさい。食事をゆっくり食べて、力を蓄えなさい。よく考えて全力で立ち向かうのです」とおっしゃりながら、食事を用意してくださいます。祝福の油を頭に注ぎ、勝利の杯を満たして、「大丈夫。私はあなたと共にいる。私が与える祝福を貴方から奪う者はいない。これが勝利の前祝だよ」と励ましてくださるのです。

死の陰の谷に行く時も、災いを恐れず前進できる。苦しめる者を前にしても、普段通りに食事ができるのは、よほど腹が据わった大人物なのではないでしょうか。違います。作者は自分を羊だと言っています。自分の身を守ることが良くできない上に、すぐ迷子になってしまいがちな羊だと自覚しています。

しかし神さまが私の羊飼いだから、こんなに落ち着いて居られるのです。イエス・キリストはおっしゃいました。「私は良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」(ヨハネ10:11)。人々は、イエス・キリストを十字架につけて「他人を救ったが自分を救えない。今すぐ十字架から降りるがよい。それを見たら信じてやろう」と罵りました。しかしご自分を守ることをせず、私たち一人ひとりの罪を贖うために、命を捨てて下さいました。そのイエス・キリストにご自分を啓示しておられる神さま。私のために命を捨ててくださるお方が、私の羊飼いですから、私は恐れないのです。

[結] 永遠の住いを目指して

この詩の締めくくりの言葉に、注目しましょう。「命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う」。恵みと慈しみを私が懸命に追い求めるものではありません。恵みと慈しみの方が、私を追いかけてきてくれるのです。しかも或る一時期だけではなく、いつもなのです。このように有難い話を聞いたことがあるでしょうか。神さまの恵みと慈しみの配慮は徹底しています。これならば恵みと慈しみをもらい損ねるはずがありません。

「主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう」。以前の翻訳では「わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう」でした。永遠に住む主の家とは天国・神の御国です。「主の家に私は帰り」。そうですね。私たちは皆、イエス・キリストが父の御許に戻っていかれ、私たちのために用意して下さっている家に帰っていくのです。

私たちの命は、この地上の生涯だけで終わりではありません。死は The end ではないのです。皆さんは、死の彼方の生を見つめておられますか。たとえ死の陰の谷に行くことになっても、災いを恐れず、「命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう」という言葉で結ぶこの詩編を歌いながら、生きていきたいものです。

完